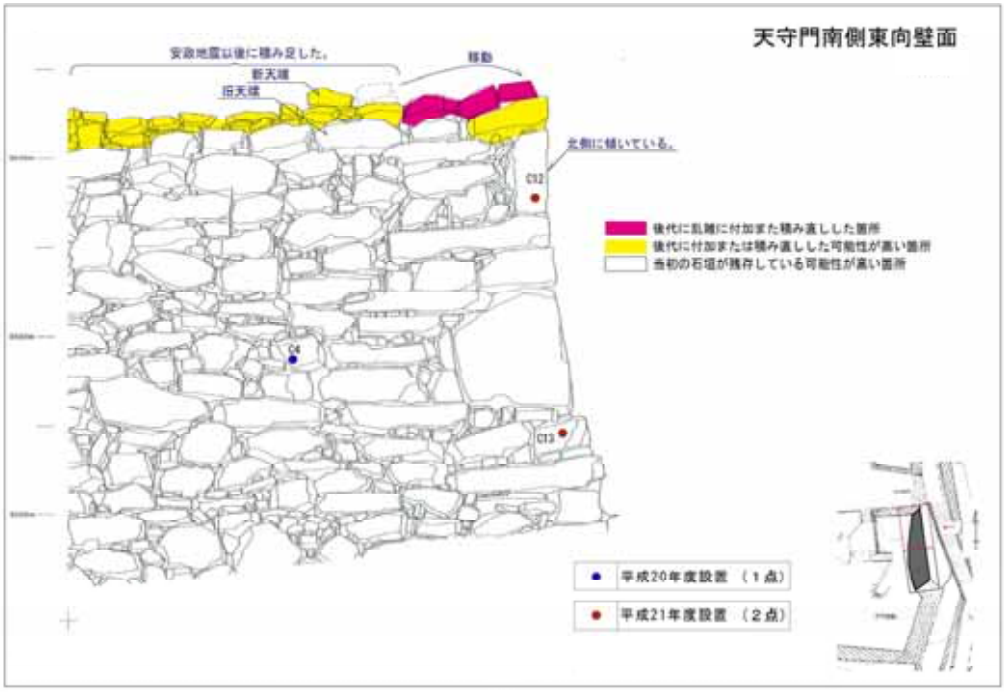
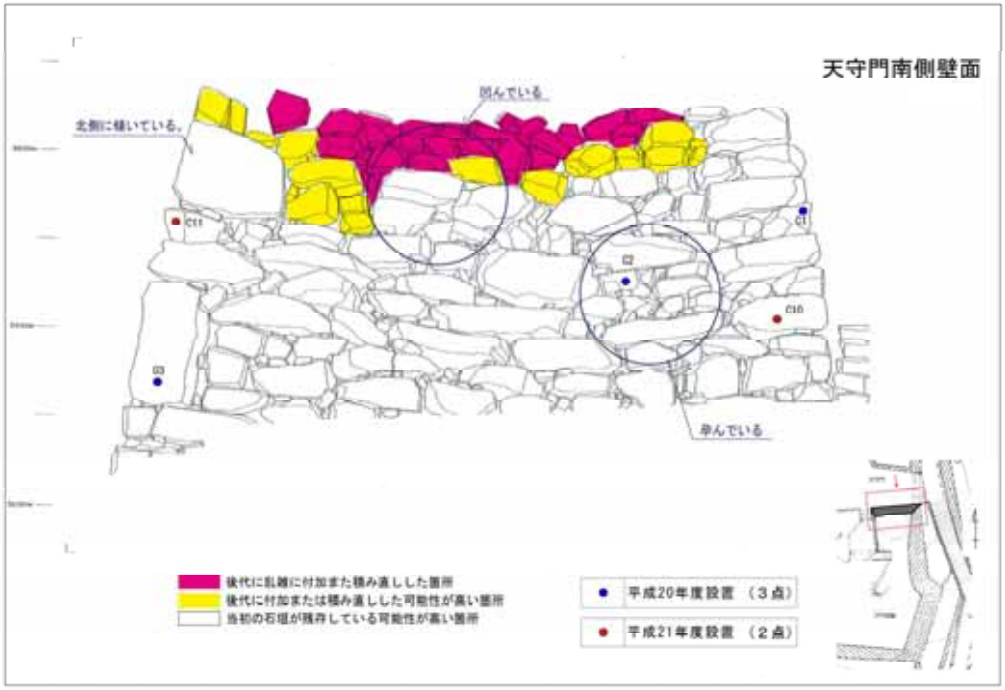
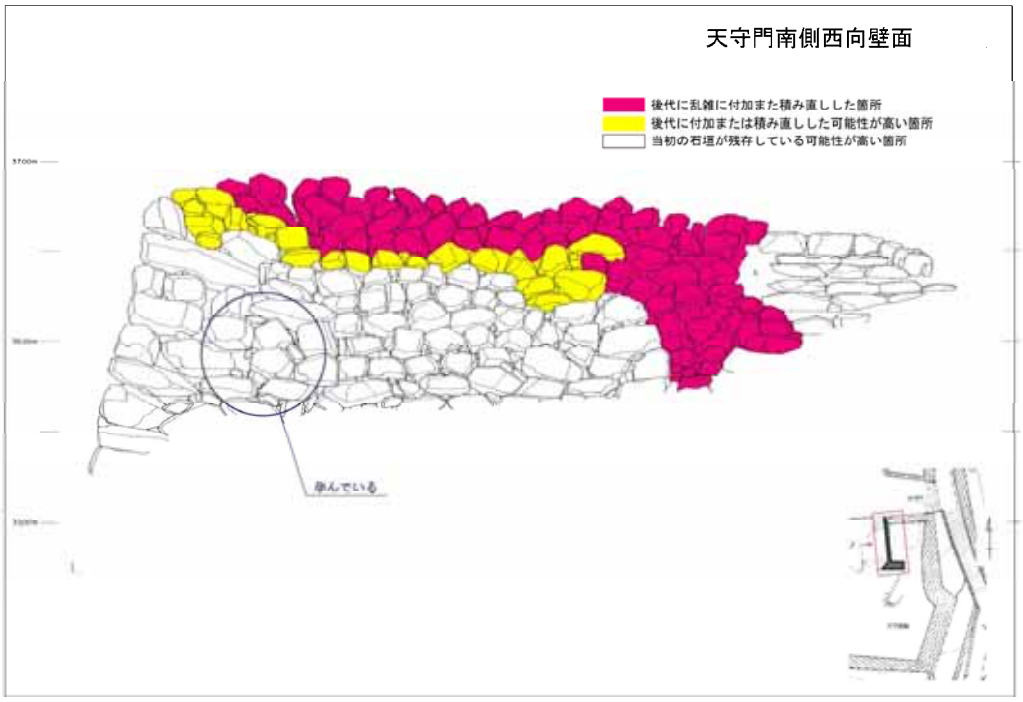
ウ　石垣の時代的変遷及び各部分に見る技法の特色

・現地踏査（立面を目視）により、石垣の面ごとに、高さ、傾斜及び曲線の状況、各石材の規模・形状・石質、石積の技法などの整理が、平成元年度浜松城石垣変状調査及び測量委託で行われている。これを基に、石垣が構築された当初の石垣が残存している箇所、後代に付加又は積み直し等の修復が行われた箇所等の整理を城郭研究の専門家の意見を反映しながら、整理する必要がある。ここでは、復原を予定している天守門跡において、写真測量を実施している南側の石垣について、広島大学大学院三浦正幸教授のご指導の下に整理した。





天守門跡南側石垣の時代的変遷（1/2）



天守門跡南側石垣の時代的変遷（2/2）

③ 保存・修復計画

ｉ　基本方針

近年、石垣の様式及び技法に関する調査研究は発展しつつあるが、その力学的構造については未解決の部分が多い。

浜松城跡については、安政大地震により天守台と天守曲輪の石垣が所々孕んだり、上部が崩壊したりして修復が行われた箇所もあるが、現実に数百年もの間、崩壊することなくその構造を維持している箇所もある。

したがって、現存する石垣を保存し、次代へ継承するために、石垣の保存・修復については、**できるだけ現状の形状を保存することを第一に考え、日常的に石垣の変状に注視していく**こととする。保存・修復については、以下のとおりとする。

ア　現行の取組み

○石垣の隙間から繁茂する雑草や樹木については、石垣の緩み、孕みの原因になるため、肥大する前に定期的な除草により対応する。

○利用者の安全確保のため、引き続き、危険箇所への立入り禁止柵（竹矢来、立入り禁止バリケード）を設置する。

イ　新規の取組み

○既存植物の根が石垣保存に影響を及ぼしている可能性が高い箇所は、順次伐採を行う。また、石垣を覆う枝葉から落ちる雨水が、石垣に悪影響を及ぼしていると考えられる樹木については、枝打ちなどの適切な樹木管理を検討する。

○文化財として、また、公園施設としての石垣の適切な維持管理や修復方法を検討するため、以下の調査を継続的に実施し、調査結果をもとに関係各課や専門家の意見を踏まえて検討する。

・石垣の記録保存のための石垣全面を対象とした測量調査

・既往調査結果をもとに、継続して石垣の緩み孕み等の計測調査

特に、樹木の伐採・伐根については、樹種や石垣の状態によって個別に検討することが必要である。伐採後に伐根まで行わず、被覆土により地中の根株を埋め込む方法があるが、経年により地中の根株が腐り、被覆土の上面に不陸が生じる場合がある。その場合には、陥没した部分に適切に土を充填するなどの維持的措置が必要である。

石垣の隙間に生える樹木

（２） その他の縄張りを示す施設について 【早期に整備を進める事項】

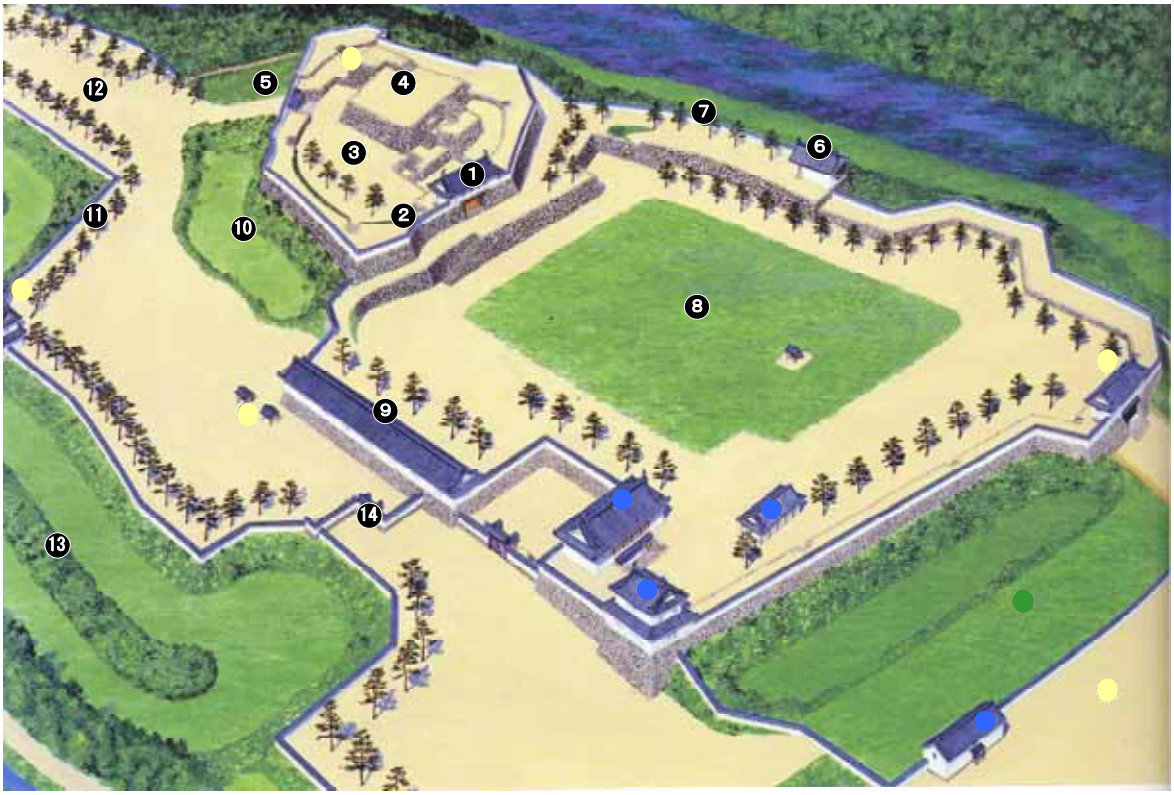
縄張りを示す施設は、石垣のほか、堀、土塁がある。

堀は、既に埋められ、地下に残存していると考えられるため、今後も適切に被覆土を施して保存する。

土塁は、天守曲輪の周囲をまわる武者走や土塁上に石垣を施した鉢巻などが特徴的である。これらの地上に残存する箇所については、今後も適切に保存・修復を図る。建造物の復原に伴い、必要となる箇所の修復を行う。

（３） 建造物の地下遺構について 【早期に整備を進める事項】

櫓、門、塀等の建造物の地上部が失われた後に地下に残存している遺構は、表面に被覆土を確保して保存することを原則とする。



浜松城天守曲輪・本丸復原図（安政元年(1854)当時 三浦正幸氏考証） 出典「日本の名城」

1 天守門 2 土塀 3 天守曲輪平坦部 4 天守台 5 埋門 6 富士見櫓 7 土塀 8 本丸平坦部 9 多聞櫓
10 空堀 11 土塁・土塀 12 西端城曲輪 13 空堀 14 清水門

＊ 富士見櫓の方向が違う。
＊ 鉄門は内枡形虎口を想像しているので、門の方向が違う。
＊ 安政元年浜松城絵図など安政年間の絵図から作成している。